

ひがし北海道・釧路 「食料備蓄・供給基地構想」

釧路の冷涼な気候、釧路港の物流機能を活用した
バックアップ拠点をめざして

（第 1 版）

平成 2 4 年 1 月

釧路食料基地構想協議会

目 次

I. 構想策定の趣旨	2
II. 構築へのアプローチ ～ “5つの視点”	4
III. 地域特性を踏まえた「食料供給基地」の形成に向けて	8
1. 一大食料基地「ひがし北海道」	
2. 釧路の冷涼な気候風土	
1) 釧路市の冷涼な気候	
2) 冷涼な気候を生かしたストックポイントの整備	
3. 物流拠点・釧路	
1) ひがし北海道の物流拠点・釧路港の既存ストックの活用	
2) 陸上高速物流ネットワークの整備	
3) 港湾物流ネットワークの整備	
4. リスク分散	
5. 年間を通じた食料の安定供給確保	
IV. 複合的なバックアップ機能を備えた拠点形成（参考）	21
V. 参考資料	22
・ 釧路食糧備蓄研究会～釧路食料基地構想協議会 主要活動経歴	
・ 「食料備蓄・供給基地構想」策定検討部会 組織構成	

I. 構想策定の趣旨

「釧路食料基地構想協議会」は、前身の「釧路食糧備蓄基地研究会」が昭和63年から続けてきた長年にわたる研究成果（釧路大規模総合食糧備蓄基地構想）を活かし、より具体的にその役割を高めるため、広く釧路管内の産官学に呼びかけ、40社を超える会員企業が参画して平成21年12月に新たに発足しました。

また、顧問には関係行政機関や経済団体のトップ、相談役には地元大学長が就任し、民間と行政、企業と団体が連携した、産学官の取り組みを進めています。

協議会では、釧路港を核に1次産業の振興を通じて、日本の食料備蓄・供給基地として、自他共に認められる“ひがし北海道”の確立・発展をめざしています。

東日本大震災以降、国家的、大局的な視点から食料の安定供給とバックアップ体制のあり方が見直されている状況において、北海道の中でも特にひがし北海道及び釧路地域が、地域特性を踏まえながら、それらの役割を果たしていく方向性を示すため、釧路食料基地構想の全体構想の再構築に先行して、生産、加工、備蓄（保管）、流通（物流）をベストミックスさせた「食料供給基地構想」を構築することといたしました。

今回、北海道が検討されているバックアップ拠点構想、食料備蓄基地構想は、食の安全安心、あるいは災害時の供給基地として正に時機を得た構想であり、当協議会のめざす方向と目的を同じくするものです。

当協議会としても、長年の研究成果という財産にさらに磨きをかけ、“北海道におけるバックアップ拠点の実現”に向けて、拠点構想、食料備蓄基地構想と連携し、さらに強力に活動を推進していきたいと存じます。

釧路大規模総合食糧備蓄基地構想 並びに 関連構想の再構築



生産、加工、備蓄、流通（物流）がベストミックスした
「食料供給基地構想」を構築

○ 方 針 ○

「ひがし北海道」の安全・安心な農水産品と釧路の冷涼な気候を活用する
食料流通に立脚した備蓄の展開と安定供給、出荷時期平準化を実現する
1次産業と加工産業・関連産業の振興、物流体系の一体的な整備を図る
リスク分散を重視し、北海道内にストックポイントの複数配置を進める



○ 目 標 ○

釧路港を核にバックアップ拠点をめざす

釧路・根室圏、十勝圏、オホーツク圏
「ひがし北海道」3圏域に期待される大きな役割

1次産品の供給・加工・備蓄基地



「釧路」が果たすことができる役割
**物流拠点・釧路港と冷涼な気候を活用した
備蓄・保管**



「ひがし北海道」3圏域が総合力を発揮
北海道のバックアップ拠点に

Ⅱ．構築へのアプローチ ～ “5つの視点”

北海道の中でも、特に一大食料基地である「ひがし北海道」が、食料備蓄(保管)・供給機能の役割を高めていくためには、「生産と物流」を「車の両輪」と位置づけた戦略的な対応が求められます。

また、食料流通に組み込まれた中で農水産物の「非常時に備えた備蓄(保管)と安定供給」の両立を図ることが、時代の要請となっています。

本協議会では、ひがし北海道の持つ食料生産・加工力と物流拠点である釧路港の潜在能力を最大限に引き出すとともに、さらなる機能向上を図ることが、その責務を担う上で、不可欠な戦略であると考えます。

そのためには、3圏域（十勝、オホーツク、釧路・根室）の特性を十分に踏まえながら、道内でも極めて冷涼でストックポイントに最適な釧路の気候と釧路港を中核とした物流機能を活かしつつ、農水産物流通の更なる平準化に向けた取り組みや自然冷熱の活用など、新たな視点を加えた構想の構築が必要といえます。

さらに、地震・津波の発生や雪害、風水害などの影響を考慮すると、北海道内に複数の拠点港湾が立地するメリットを生かし、太平洋側と日本海側、さらに日高山脈を挟んだ東西への拠点形成と、陸上高速物流体系整備による相互連携の強化が、備蓄リスクの分散に大きな効果を発揮することが期待されます。

釧路港と背後圏（釧路・根室、十勝、オホーツク）は “ひがし北海道総合エリア”として、「生産、備蓄、供給」に適した特性を有しています

1. 一大食料基地「ひがし北海道」

- ① 多様な農産品、酪農畜産品、水産品、清涼で豊かな水資源などを有し、農産品、水産品は北海道内でもとりわけ高い生産占有率を誇ります
- ② 輸入依存度の高い小麦、大豆などの国内生産拡大を実現する適地です
- ③ 気候特性が安全・安心な生産を可能とし、生産地での1次ストックにも適します
- ④ 食料関連産業の集積と高次加工、高付加価値化への取り組みが各地で進んでいます

2. 釧路の冷涼な気候風土

- ① 涼しい北海道でも、特に稀有な、冷涼な気候が低コスト化や品質保持に有効であり、ストックポイントに好適です
- ② 国内有数の日照率を誇り、冬季でも天候が安定し、大雪による輸送障害が少ない
- ③ 年間を通した冷涼な気候と氷冷熱、太陽光などを組み合わせることで相乗効果が生まれ、自然エネルギーをさらに有効に活用できます

- ④ 地域に自然エネルギーや物流基盤を活用した食料備蓄について、具体的な研究・提案を行ってきた下地があります

3. 物流拠点・釧路

- ① 物流拠点として関連施設、事業所、人材等のインフラが集積している、ひがし北海道の物流拠点・釧路港を有しています
- ② 釧路港と背後圏を結ぶ高速・高規格道路網を整備し、釧路港を核とした総合的な輸送体系を構築することによって、ひがし北海道の一体的発展が図られます
- ③ 今後、国際バルク戦略港湾として整備が進み、北米に最も近い国内拠点である釧路港での輸入飼料穀物の備蓄拡大を実現することで、輸入穀物飼料の安定供給にさらに貢献できます（釧路港は現在でも2万トンの飼料用とうもろこしを備蓄しています）

4. リスク分散

- ① 最大消費地である関東圏への食料偏在リスクを解消するため、産地・拠点港湾での備蓄(保管)を拡大する必要性があり、ひがし北海道は地勢面からもメリットがあります
- ② 北海道内におけるリスクの分散では、太平洋側と日本海側、さらに気象条件が大きく異なる日高山脈を挟んだ東西地域に所在する複数の拠点港湾（太平洋側はROR航路、コンテナ航路に対応できる釧路港、苫小牧港）に拠点を形成することと、陸上高速物流体系整備による相互連携の強化が、大きな効果を発揮することが期待されます
- ③ 釧路港は、耐震バースが整備されるなど、防災拠点機能を有しています

5. 年間を通じた食料の安定供給確保

- ① 食料の安定供給には、1次産品の道内備蓄(保管)を増やし、出荷時期の平準化や産地加工の取り組みをさらに深めていく必要があります
- ② 出荷時期の平準化は、産地圏域での備蓄確保による非常時対応力の保持とともに、食料生産の永続に不可欠な1次産業の安定経営（経営体力の強化）や、効率的な物流体系の整備・運用に寄与できます

図：食のバックアップ拠点をめざして～「構築イメージ」

釧路では昭和63年から大規模食糧備蓄基地研究を進めてきました

ひがし北海道の発展には、食料供給・備蓄基地として自他共に認められるレベルへ引き上げることが不可欠（釧路食料基地構想協議会での活動へ移行）

食料生産・供給地としての
“ひがし北海道”の優位性

生産

農水産品の大量安定供給

- ・ 農産品、酪農品の1大生産地（輸入依存品の生産拡大にも適地）
- ・ 道内の半分を占める漁業生産
- ・ 安全安心な農業を実践
- ・ 清涼で豊富な水資源

加工

食品産業の集積と可能性

- ・ 高次加工への脱皮に努力
- ・ 付加価値の向上に努力
- ・ 加工産業育成振興の取り組み（例）氷冷熱活用、地域ブランド化推進、フードバレーとかち、スマーターフィッシュプロジェクト、輸出振興など

ストックポイント、流通拠点としての
“釧路”の優位性

備蓄

備蓄基地としての優位性

- ・ 非常に冷涼な気候（低コスト備蓄）
- ・ 氷冷熱、太陽光など自然エネルギーを有効活用できる
- ・ 既存のストックポイントが活用できる

物流

物流拠点としての優位性

- ・ ひがし北海道を背後圏に持つ釧路港の既存物流拠点機能
- ・ 物流拠点として施設、事業所、人材等のインフラが集積
- ・ 大雪による輸送障害や除雪費用が少ない

リスクの分散～日高山脈の東西に拠点を配置することでリスクを分散～



生産・加工・備蓄・供給基地「ひがし北海道」の一体的発展

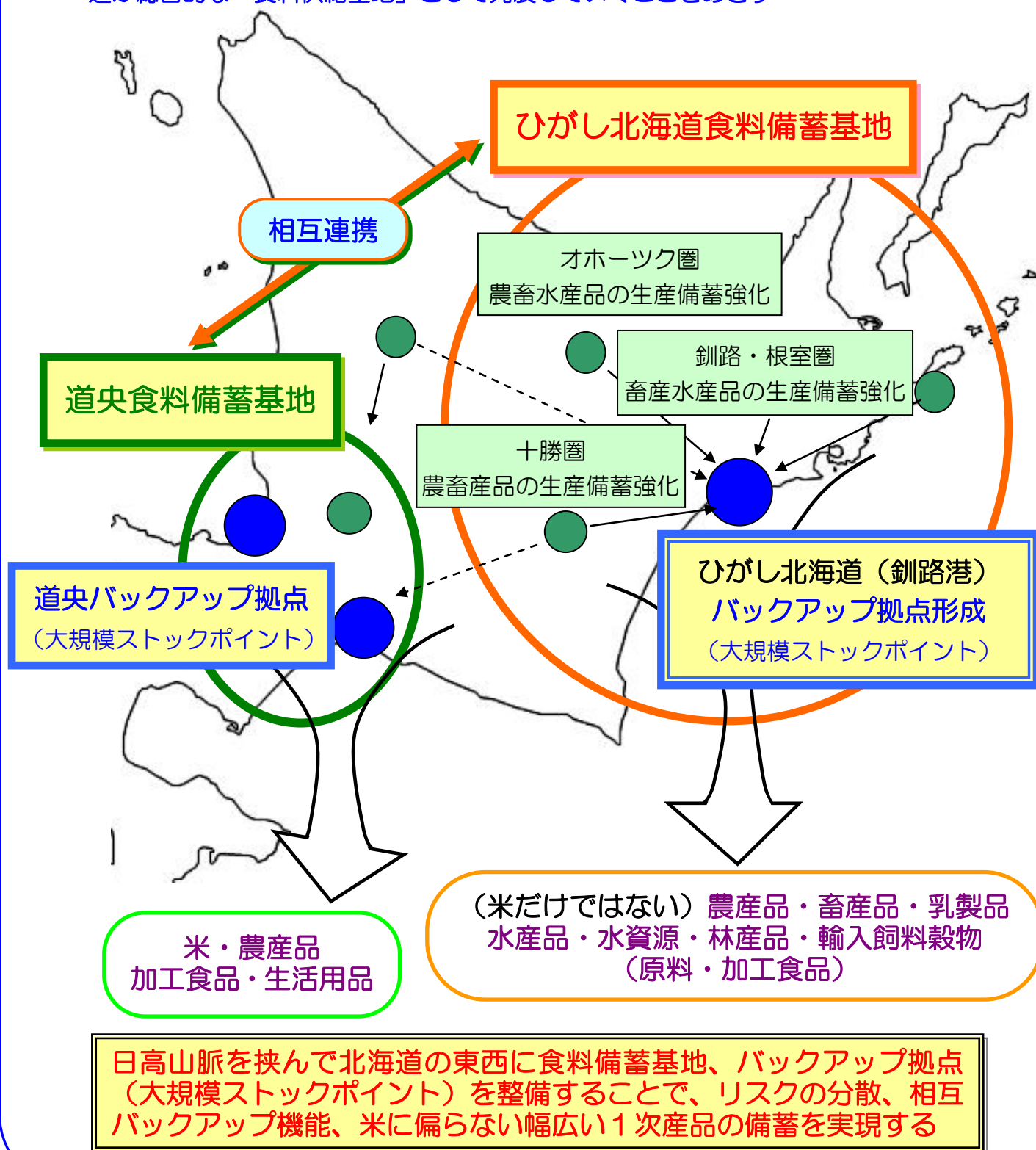
ひがし北海道の安全・安心な農水産品と
釧路の冷涼な気候を活用した食料の備蓄(保管)と安定供給

釧路港を核にバックアップ拠点をめざす

図：ひがし北海道・釧路がめざすイメージ

ひがし北海道食料備蓄・供給基地、バックアップ拠点

十勝圏、オホーツク圏、釧路・根室圏が農産品、酪農畜産品、水産品などの生産・加工地、1次ストックポイントとして、それぞれの特性を発揮し、冷涼な釧路（釧路港）が最終的なバックアップ拠点機能（備蓄・流通・加工）を果たすことで、**ひがし北海道**が総合的な「食料供給基地」として発展していくことをめざす



Ⅲ. 地域特性を踏まえた「食料供給基地」の形成に向けて

本章では、第2章において提起した“5つの視点”について、個別・具体的に記述します。

1. 一大食料基地「ひがし北海道」

北海道の中でも、特に「ひがし北海道」は農産品、酪農品、水産品、飲料水などの一大食料生産基地となっています。

農業・酪農分野では、気候特性を生かした安全・安心な農業を実践しており、地球温暖化により耕作適地や酪農適地の北上が想定される中にあっても、引き続き食料生産基地としての重責を担うことが可能とされています。

今後は、政府が目標とする食料自給率の向上に資するためにも、自給率の低い作物の生産拡大や輪作体系の維持、必要な農地改良普及事業等の実施など潜在能力を引き出す諸施策の実施と合わせ、流通機能を伴った産地・道内拠点港湾での食料の保管・供給体系の構築・拡大によって、道外移出の平準化と競争力の強化、加工業の振興を進めていくことが必要です。

加えて、釧路港の国際バルク戦略港湾指定により、輸入飼料穀物の安定供給、物流コストの削減効果を生かした酪農、畜産業の振興発展が期待されます。

また、水産業は太平洋、オホーツク海に面し、道内の漁業生産の半分を占め、国内有数の漁業基地となっているほか、輸入水産物の加工基地でもあります。

いずれも、高次加工や付加価値の向上に努力を続けており、ブランド化や国内価格の安定にも寄与する輸出の促進に積極的に取り組んでいます。

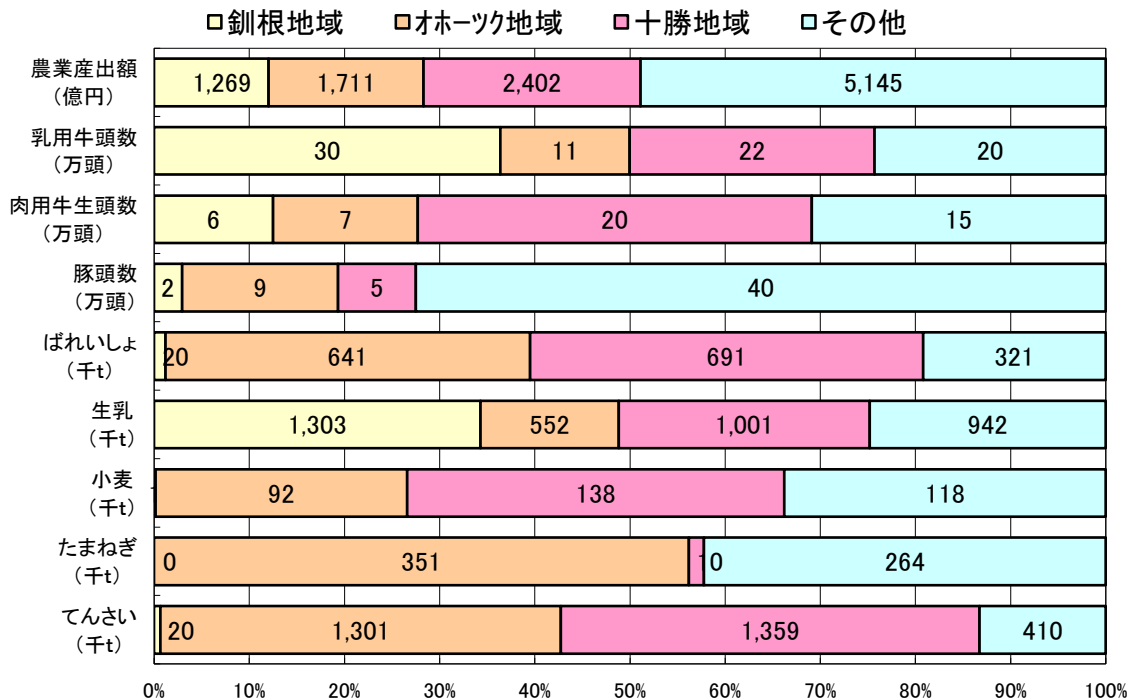
さらに、阿寒連峰、日高山脈、大雪山系などからもたらされる、清涼で豊かな水資源を生かしたミネラルウォーター・飲料水事業、医薬品事業なども展開されています。

このように、北海道総合計画で定める3圏域（釧路・根室圏、十勝圏、オホーツク圏）からなる「ひがし北海道」は、それぞれが異なる地域特性を有しており、これら3圏域が相互補完・連携することで、1次産業圏域として高い総合能力を備えています。

統計データからみた、ひがし北海道の1次産業

○ ひがし北海道(3圏域)の農産品が道内で占める割合

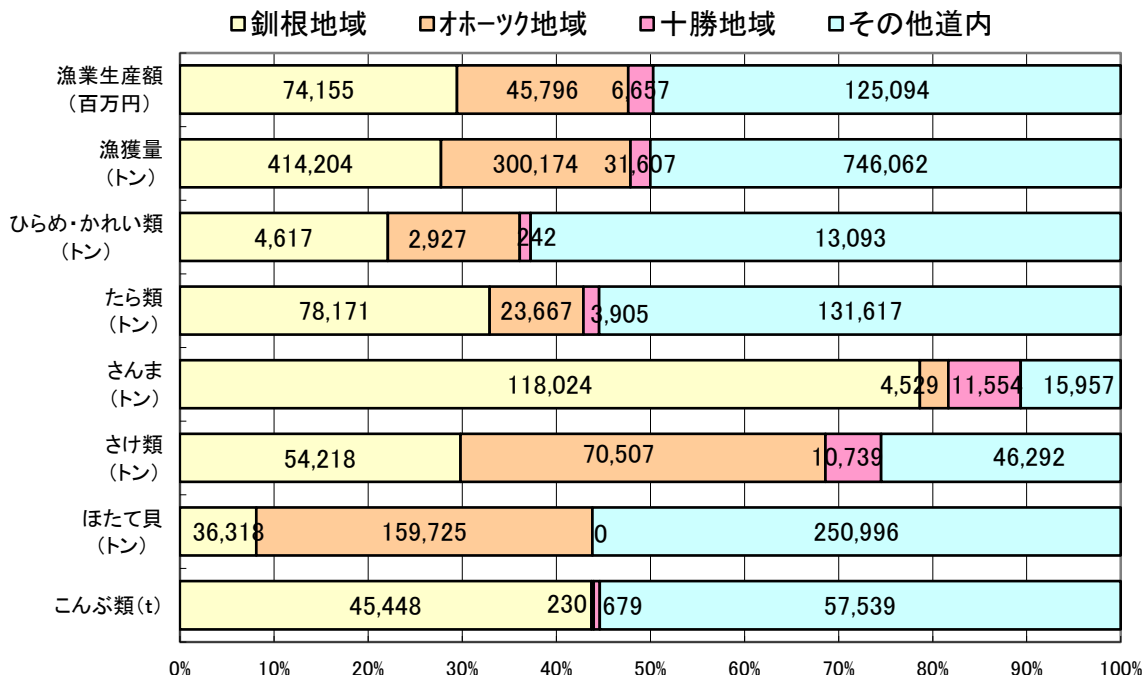
～ひがし北海道3圏の農業産出額は5,382億円で、道内の50%を超えています～



出典：牛乳乳製品統計(H18)、農林水産省生産農業所得統計(産出額)、農林水産省野菜生産出荷統計(H18 たまねぎ、H21 ばれいしょ)、農林水産省畜産統計(H19 乳用牛/肉牛/豚飼育頭数) 農林水産省作物統計(H20 大豆、H22 小麦・てんさい)

○ ひがし北海道(3圏域)の水産品が道内で占める割合

～漁業生産額と漁獲量は、ひがし北海道3圏で道内の50%を占めています～



出典：農林水産省漁業・養殖業生産統計(H21) ※漁業生産額は北海道水産林務部北海道水産現勢(H21)

参 考 資 料

「北海道バックアップ拠点構想」中間とりまとめ（北海道、２０１１年）で示された
３圏域（釧路・根室、十勝、オホーツク地域）の地域特性と拠点形成の基本方向

※北海道庁ホームページより引用

釧路・根室地域

高い食料生産力をはじめ、太陽光など豊富な再生可能エネルギー資源の活用、さらには国際バルク戦略港湾に選定された釧路港の有効利用等により、食料やエネルギーの生産・供給の拠点としての役割が期待される。

《地域特性》

- ・大規模酪農業やサケ・マス、サンマなどの水産業が盛ん
- ・太陽光やバイオマスなどの豊富な再生可能エネルギー資源が賦存
- ・国際バルク戦略港湾に選定された釧路港が存在

《拠点形成の基本方向》

- ・農水産物や加工食品などの安定的な生産・貯蔵・供給体制の強化
- ・バイオマスや太陽光などを活用した再生可能エネルギーの生産拡大
- ・多様なエネルギー資源の確保につながる国内唯一の坑内掘炭鉱技術の保全・継承など

十勝地域

平坦な地形に恵まれた広大な土地や道内においても優位性のある高い食料生産力をはじめ、太陽光やバイオマスなど豊富な再生可能エネルギー資源を活用することにより、食料やエネルギーの生産・供給の拠点としての役割が期待される。

《地域特性》

- ・大規模な畑作経営や酪農経営などによる高い食料生産力
- ・太陽光やバイオマスなどの豊富な再生可能エネルギー資源が賦存
- ・重要港湾である十勝港が存在
- ・道東自動車道の開通により、道央地域との人やモノの移動の利便性が飛躍的に向上

《拠点形成の基本方向》

- ・農産物や加工食品などの安定的な生産・貯蔵・供給体制の強化
- ・バイオマスや太陽光などを活用した再生可能エネルギーの生産拡大 など

オホーツク地域

高い食料生産力や豊かな森林資源、太陽光やバイオマスなど豊富な再生可能エネルギー資源を活用することにより、食料やエネルギーの生産・供給の拠点としての役割が期待される。

《地域特性》

- ・酪農や小麦、馬鈴しょなどの大規模農業、豊かな森林資源を活用した林業、ホタテ、サケなどの栽培漁業など農林水産業が盛ん
- ・太陽光やバイオマスなどの豊富な再生可能エネルギー資源が賦存

《拠点形成の基本方向》

- ・農水産物や加工食品などの安定的な生産・貯蔵・供給体制の強化
- ・バイオマスや太陽光などを活用した再生可能エネルギーの生産拡大 など

※本内容は、「北海道バックアップ拠点構想」中間とりまとめの記述を掲載しており、同構想の最終報告では内容が変更される場合があります。

2. 釧路の冷涼な気候風土

1) 釧路市の冷涼な気候

釧路市は冷涼な北海道でも、特に冷涼な気候です。

特筆されるのは、寒流の千島海流の影響や海霧の発生により、**夏季は道内他地域よりかなり低い気温で推移し、真夏日、夏日とも非常に少なく**、このことは倉庫での備蓄においてランニングコスト、エネルギー消費、雪氷管理などの面で、優位性を持ちます。

夏は好天になると気温は上昇するものの他地域より一段低く、海霧の発生や海風の吹き込みにより夏日であっても一日中高温が続くことは稀です。また、冬季は晴天日が続き、大雪による輸送障害も非常に少ない地域です。

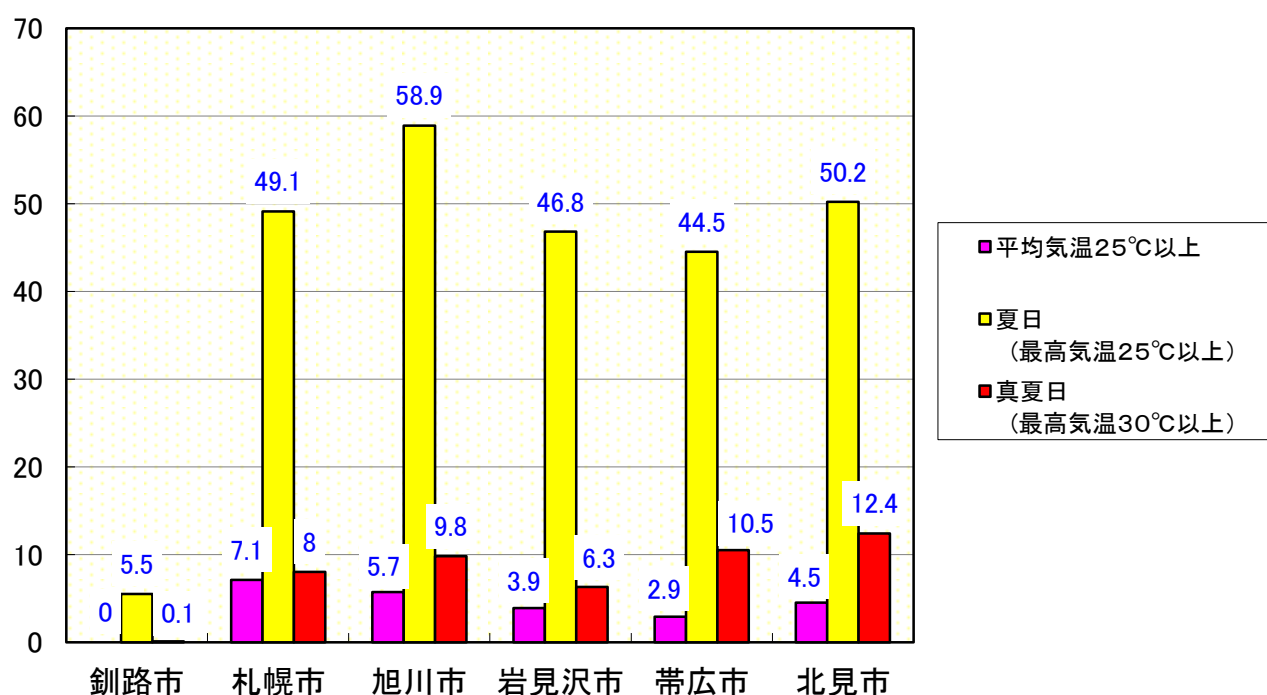
さらに、釧路は年間の日照時間が長い（過去30年の平均で約1970時間）ことから、太陽光発電にも適しています。

過去の気象データによる比較

①主要都市の真夏日、夏日等の平年日数比較（1981年－2010年）

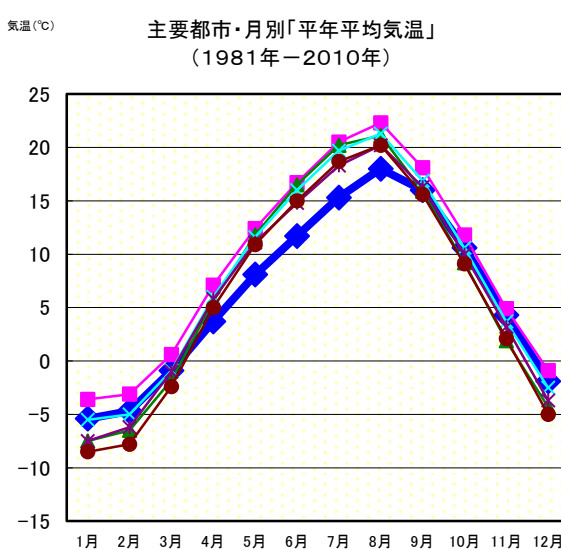
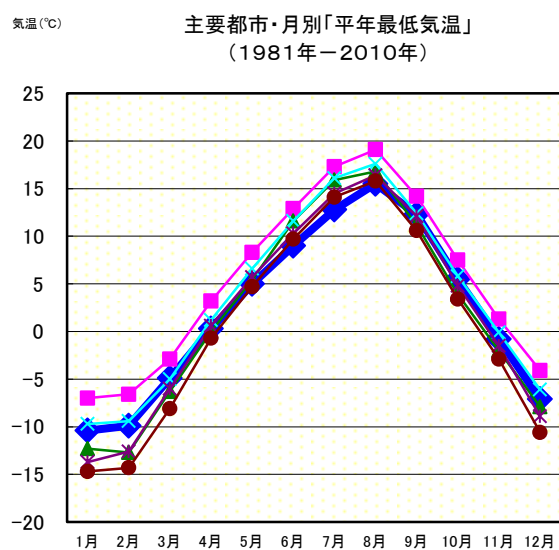
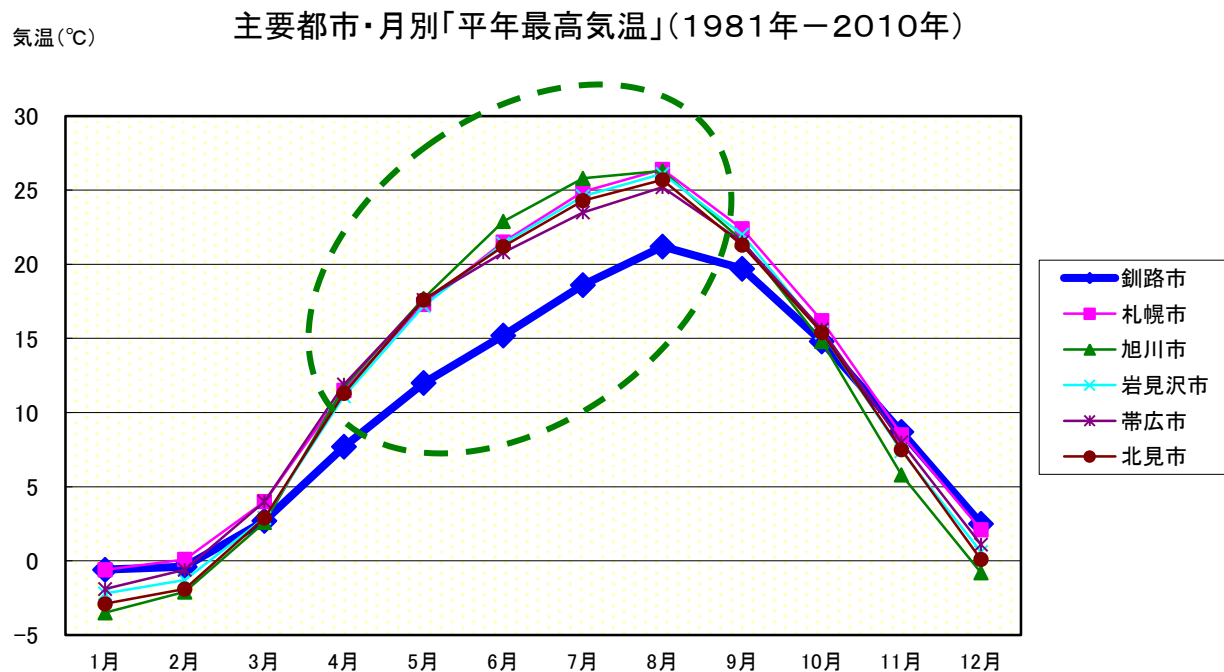
～ 釧路市の夏は真夏日がほとんどなく、夏日もわずか ～

夏日（最高気温25℃以上）、真夏日（同30℃以上）、平均気温25℃以上の
平年日数（1981年－2010年）

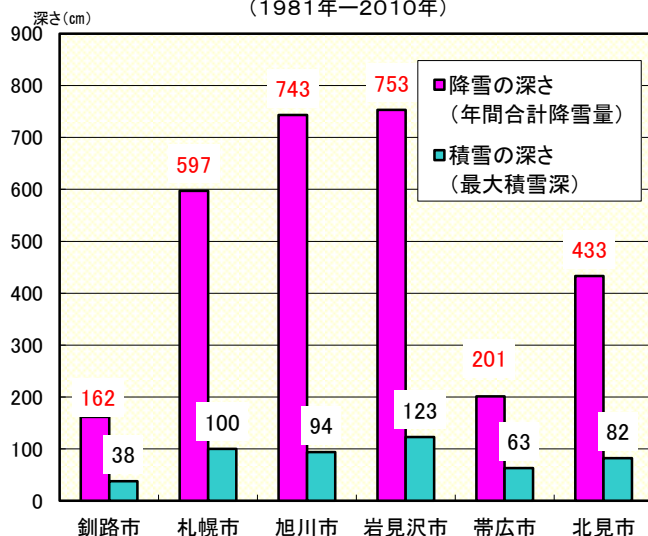


② 道内主要都市の気温平年値の比較（1981年－2010年）

～ 夏季の平均最高気温が、道内他都市よりも5℃前後も低い釧路 ～



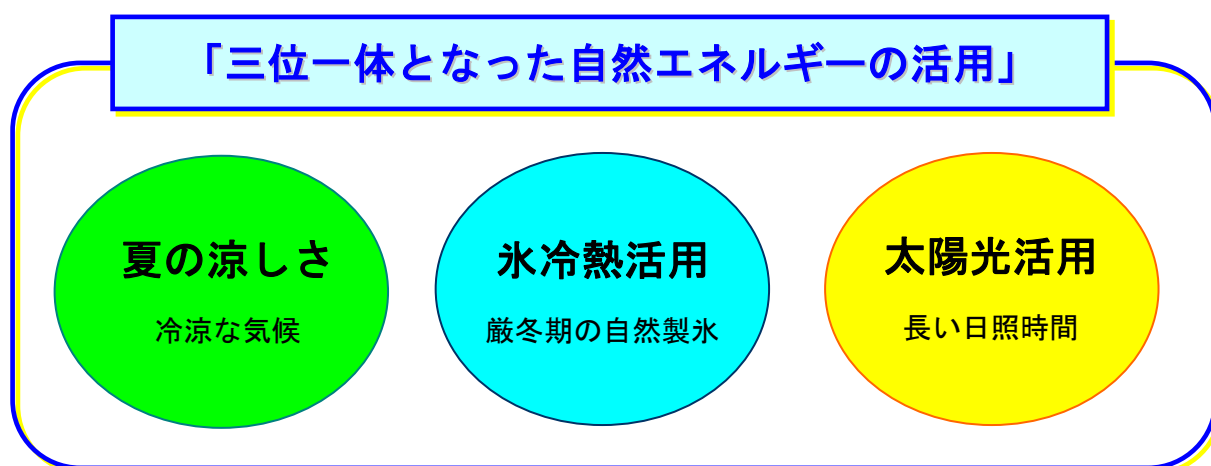
主要都市別・平年年間合計降雪量及び最大積雪深
(1981年－2010年)



③ 道内主要都市の降雪量比較 (1981年－2010年/年平均)

～ 太平洋岸に位置する釧路は、
年間の合計降雪量が非常に
少なく、最大降雪深も38cmに
とどまり、「ドカ雪」が少ない～

2) 冷涼な気候、氷冷熱を生かしたストックポイントの整備



① 冷涼な気候を活用した「常温」食料品備蓄(保管)倉庫

釧路は年間を通じて冷涼な気候のため、**通常の倉庫であっても定温管理のコストが低く**、他地域と比べてエネルギー消費やランニングコストを低減できます。

また、**釧路港を中心に倉庫及び関連施設が多数立地しており、既存ストックを有効に活用**することができます。

② 冷涼な気候を活用した「氷冷熱」利用の食料品備蓄倉庫

冷熱源として「氷」と「太陽光」を想定した、単純な構造の備蓄倉庫です。この形態は雪冷熱では既に実用化されています(イニシャルコストの面で課題はあります)。

氷は雪よりも遥かに密度があり、高い冷熱効率を発揮し、管理もより簡易になります。

さらに、釧路の気温の低さが相乗効果となり、氷の減少率は他よりも低くなります。

基本的に氷柱・氷板を用いて、ファンで冷気を循環させる仕組みですが、氷は厳冬期に建屋を開放し冷気を取り入れ、またはファンで冷気を送り込むことで、施設内や隣接地などで製氷することができ、雪を集めて運ぶ必要がなく、効率的です。

ファンは太陽光発電による電気での稼動を想定しています。

③ ヒートパイプによる冬氷(自然冷熱)利用低温貯蔵施設

釧路食糧備蓄基地研究会では、②に加えて、**冬期間の冷熱により冷熱源となる氷をヒートパイプを通して蓄熱槽に製氷し、年間を通して一定の温度・高湿度を保つことができる貯蔵システム**を研究してきました。

この方式は貯蔵物の品質劣化が小さく、農作物の長期保存に向いています。

熱輸送の能力が大きいヒートパイプを用いることで、より省エネルギーに貢献できます。

冷凍機にて比べイニシャルコストは高くなりますが、ランニングコストが低減できることで、長期的に有利なシステムです。



【イメージ】

3. 物流拠点・釧路

ひがし北海道の物流拠点である釧路港は、太平洋に面した重要港湾で海陸交通ネットワークの要衝に位置しており、コンテナ船やRORO船など月約80便の定期船が就航しています。

また、年間1500万トンの貨物を取り扱い、水深14m岸壁の整備や外貿コンテナ定期航路の就航など港湾機能の充実が図られ、国内外との物流ネットワークもますます拡充しています。

また、平成23年には国際バルク戦略港湾に選定され、今後、重点的な港湾整備が行われることが期待されています。

このように整備が進む釧路港の既存物流機能を活かし、ひがし北海道の生産地と物流拠点・釧路港との広域的ネットワークを整備することによって、農水酪農産品をそのまま消費地に輸送するのではなく、貯蔵や加工による高付加価値化を図り、価格変動をみて出荷時期を調整する効率的な保管管理体制を構築することで、食料基地としての総合的な機能が確立されます。

1) ひがし北海道の物流拠点・釧路港の既存ストックの活用

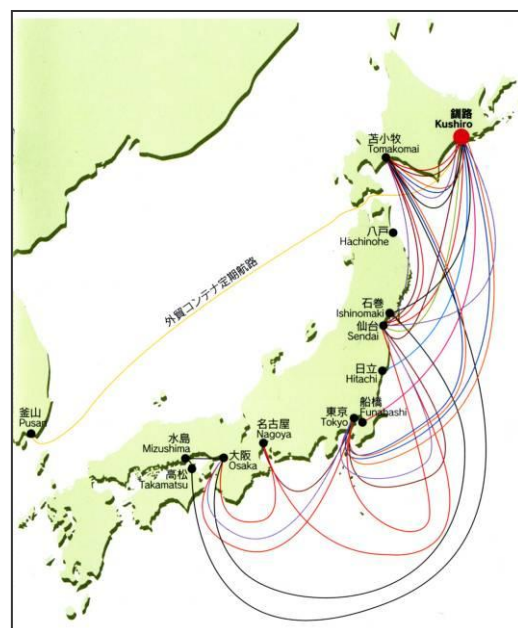
○多数の倉庫及び港湾サービスが集積

ひがし北海道の物流拠点として発展する釧路港では、多数の倉庫や関連施設が立地し、港湾・陸運サービス等も充実しており、人材を含めて既存ストックを有効に活用できます。

釧路港は、ひがし北海道で唯一RORO船、内航・外貿コンテナ船の定期航路を持つ物流拠点港で、重点港湾として今後も新規投資が継続されることとなっており、24時間フルオープン化などソフト面の対応も進めています。

今後、取扱量を増加させることで、新規航路の開設や既存航路の拡大、増便による利便性の更なる向上をめざしています。

また、東港区には全長310m水深9mの耐震バースが完成し、防災拠点としても重要な役割を担っています。



2) 陸上高速物流ネットワークの整備

世界的な経済情勢の悪化により地方の経済は厳しさを増し、加えて少子高齢化による人口減少が進むなか、これまでのように一地方地域単独で発展していくことは困難となっています。これからは、地域と地域がネットワークによって広域的な圏域を形成し、互いの地域特性を活かしあいながら共栄をめざす、これまで以上に強い連携が求められます。

しかし、広大な北海道では中核都市の距離が離れているため、都市間を結ぶ道路網の整備が特に重要となっています。

ひがし北海道圏（釧路・根室・オホーツク・十勝）は、北海道総面積の約43%にあたり、九州の総面積に相当します。一大食料基地である「ひがし北海道」の生産物を産地から、付加価値を高めるために加工・貯蔵するストックポイント、そして消費地へ効率的に供給するための拠点となる釧路港へと輸送する、これらの地域間の広域的な高速物流ネットワークを整備することで、圏域を超えた一体的発展が期待されます。

加えて、北海道横断自動車道は道央圏の大規模バックアップ拠点、食料備蓄基地との相互補完においても、非常に大きな役割を果たします。

また、これらの物流ネットワークは、経済連携にとどまらず、医療連携や非常時の避難ルートの確保など生活面・安全面での連携にも繋がるものです。

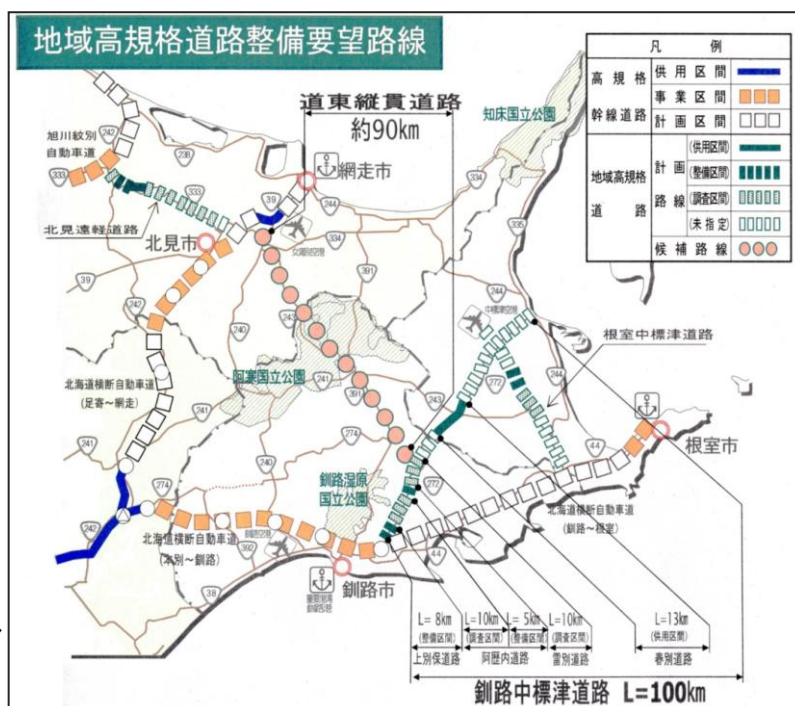
北海道横断自動車道（道東自動車道）

現在は千歳恵庭から浦幌まで開通、平成27年度までに釧路市阿寒町まで開通する予定で、今後の伸展により、十勝圏と釧路港間の輸送時間短縮や、道央圏と上川地方（占冠村経由）からの物流の効率化も見込まれます。また、**道央圏のバックアップ拠点との相互連携における基幹路線として重要なルート**です。さらに釧路市以東については根室市までの効率的・効果的な整備を促進することで、釧路港と釧路圏東部や根室圏から出荷される1次製品の輸送効率化に資することとなります。

道東縦貫道路

地域高規格道路の候補路線であり、釧路港と１次産品の一大生産地であるオホーツク圏域を結び、食料基地・ひがし北海道を縦貫する基幹ルートとして、早期整備が不可欠な重要路線です。

整備が実現することで、
釧路港とのアクセス時間が
大幅に短縮されるとともに、
冬季間の峠部等での交通障



【釧路地方総合開発促進期成会 平成24年度要望書より】

害を大幅に改善することができ、１次産品・加工品の輸送に加えて、釧路港からのオホーツク圏域への石油等の燃油、飼肥料など産業・生活に不可欠な物資の通年安定輸送も確立することができます。

釧路中標津道路

釧路市から標津町まで、酪農地帯、漁港を結ぶ高規格道路の段階的整備が進んでおり、釧路・根室圏の重要産業路線として着実な整備の伸展が期待されます。

根室中標津道路

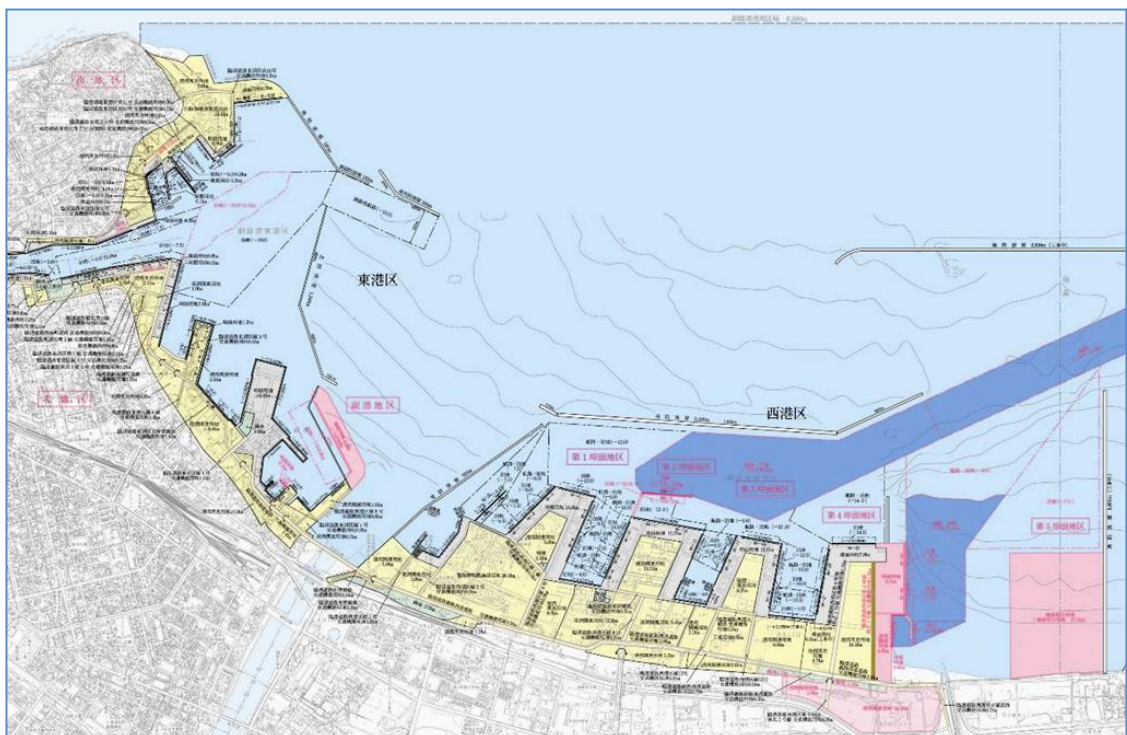
根室市と中標津町を結ぶ地域高規格道路の計画路線で、根室圏内のアクセス充実や高規格路線とのネットワーク化の伸展により大きな効果を発揮することが期待されています。

３）港湾物流ネットワークの整備

○釧路港の整備

平成２３年１１月、国土交通省交通政策審議会港湾分科会において、釧路港の港湾計画の改訂（目標年次：平成３０年代後半）が了承され、今後は改訂された計画に基づいて整備が進められることとなりました。

計画改訂においては、基本方針として、国際バルク戦略港湾選定に伴い穀物輸送ネットワークにおける東日本の拠点的功能を担うとともに、外内貿ユニットロードの強化など「東日本を代表する物流拠点港としての機能強化」や「多様なエネルギーの供給機能の確保・強化」を掲げています。



○国際バルク戦略港湾（穀物）

現在、釧路港での穀物輸入はマイナス12メートル岸壁で取り扱っており、現在就航している大型船（パナマックス船）が満載では入港できないことから、セカンドポートでの取扱いとなり喫水調整が必要でしたが、国際戦略バルク港湾として、2015年を目標に、パナマックス船が直接

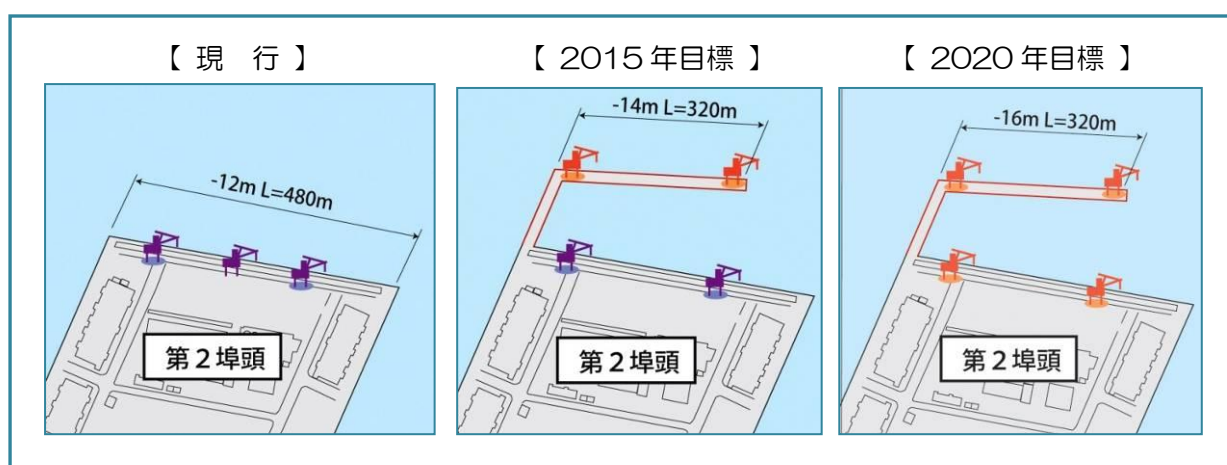


入港可能となるマイナス14メートル岸壁の整備を進めることとしています。

また、現在進められているパナマ運河拡張後に投入が予想される大型船の直接入港に対応したマイナス16メートル岸壁への増進についても、2020年を目標に計画されています。

釧路港は、これらの整備により、北米から一番近い港という地の利を活かし、釧路港を經由して道内、東北各港湾へ繋ぐことにより、北海道・東北の酪農畜産農家への安定的な飼料供給が可能となると見込まれています。

これらにより、釧路港の背後圏である“ひがし北海道”の酪農畜産業の基盤強化が図られ、関連する産業の創生等、地域経済の活性化にもつながり、食料基地としての北海道の可能性を拓け、道内経済の活性化に大きく寄与することが期待されます。



4. リスク分散

食料備蓄は、災害非常時の円滑な食料供給が目的であることから、最大消費地である関東圏に多くの食料が偏在するリスクを解消し、遠隔地の産地・産地拠点港湾での備蓄（流通保管）を拡大する必要があります。

同様に、北海道内においても太平洋側、日本海側、日高山脈を挟んだ東西に拠点を複数構成することで、リスクの分散が図られます。

- 1) 最大消費地である関東圏に食料が偏在するリスクを解消するためには、相当程度の距離をもった分散立地が必要であり、北海道での備蓄（保管）は地勢面からメリットがあります

東京－北海道・釧路市の直線距離 約900 km

- 2) 津波被害を考慮した場合、北海道内における備蓄リスクの分散では、太平洋側と日本海側への立地が想定されますが、気象変化への対応も重要な視点です。
北海道は日高山脈を挟んで気象が大きく異なることが多く、特に冬季は顕著です。道内太平洋側には拠点港湾である苫小牧港、釧路港が東西地域に分かれて所在しており、両地域に拠点を形成することと、陸上高速物流体系整備による相互連携の強化で、より大きな効果を発揮することが期待されます

苫小牧市－釧路市の直線距離 約230 km

（参考：東京－名古屋 約260 km）

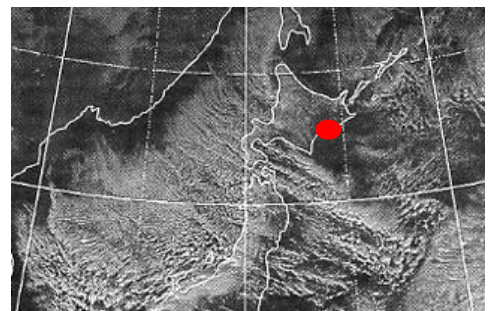
札幌市：1月の雪日数／28.8日

降雪深さ／173 cm

釧路市：1月の雪日数／15.8日

降雪深さ／44 cm

強い冬型の気象衛星画像、釧路市は快晴（気象庁資料）



- 3) 釧路港はRORO航路、コンテナ航路が就航しており、港湾設備・荷役ハンドリングの面からも、非常時の輸送にスピーディーに対応できます。

- 4) 釧路港は、耐震バースが整備されるなど、防災拠点機能を有しています



5. 年間を通じた食料の安定供給確保

食料の安定供給には、1次産品の道内備蓄（保管）を増やし、これまで進められてきた出荷時期平準化への取り組みをさらに深めていく必要があります。

道外移出の秋冬期集中を大幅に緩和するため、生産地における農水産物集出荷貯蔵施設の追加整備や冷凍・定温倉庫等のさらなる整備が必要です。

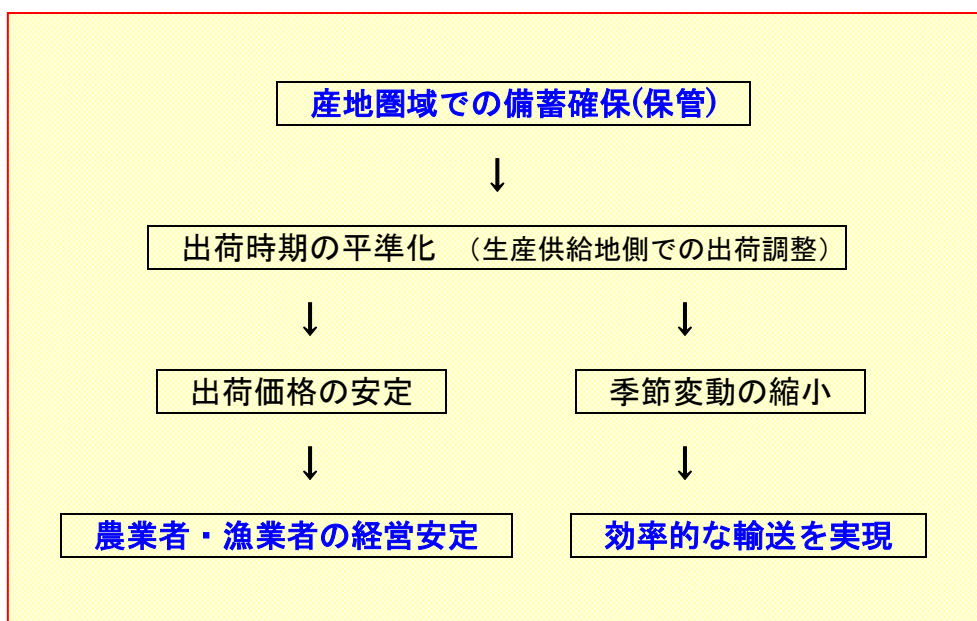
そのためにも、流通に立脚した備蓄機能を持つ保管施設の整備や備蓄在庫を扱う流通事業者に対する公的インセンティブの付与なども重要な課題です。

一方、現下の財政状況から、新規施設の整備に限られることも想定され、費用対効果の面から釧路港地域の倉庫等の既存貯蔵施設を有効に活用することで、産地・拠点港湾の相互連携を深めながら、圏域としての備蓄機能を高めていくことが必要です。

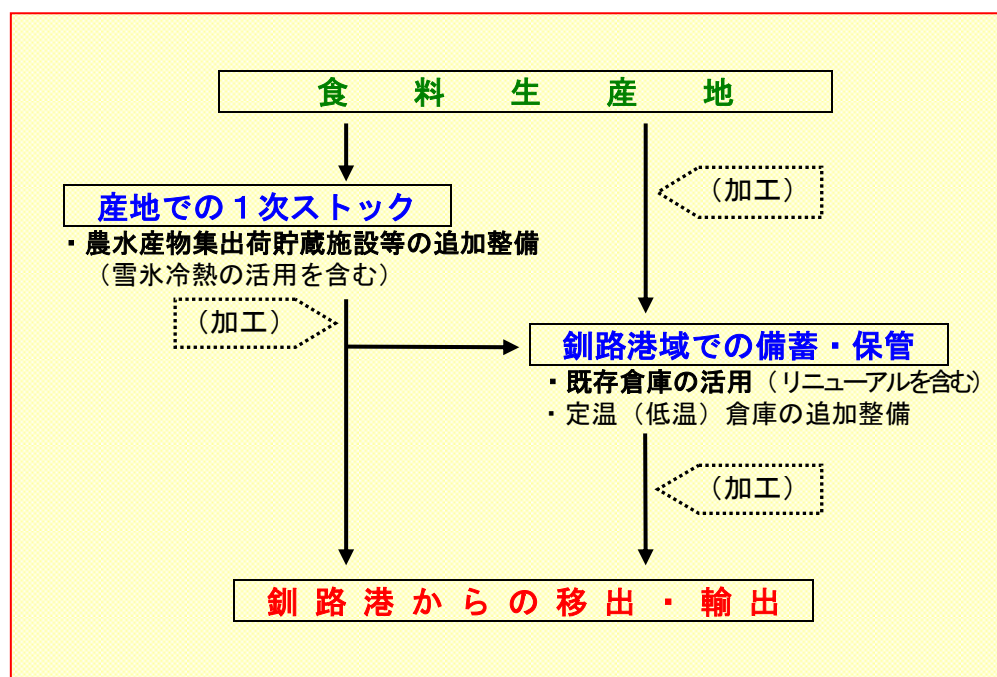
また、産地・拠点港湾において、備蓄・保管の一環として食品加工業の振興を図ることも食料基地としての発展に重要な要素です。

出荷時期の平準化が図られると、産地圏域での備蓄確保による非常時対応力の保持とともに、生産供給地側で出荷を一定程度コントロールすることで価格の安定が可能となることから、食料生産の持続に不可欠な1次産業（農業者、漁業者）の経営体力の向上につながり、季節変動の縮小は効率的な物流体系の整備・運用に寄与できます。

図：食料備蓄による、出荷時期平準化の効果



図：圏域としての備蓄（流通保管）機能整備のイメージ



表：釧路市の普通倉庫の設置状況

種 類	棟数・基数	面積・容積
市営上屋	19棟	63,644 m ²
1～3類倉庫	104棟	184,265 m ²
貯蔵槽	259基	339,399 m ³
冷蔵倉庫	43棟	353,566 m ³

出典：平成22年度普通倉庫概況(北海道倉庫業連合会)

Ⅳ. 複合的なバックアップ機能を備えた拠点形成（参考）

前章までは、食料基地構想協議会が担う分野として、食料の生産供給基地「ひがし北海道」の役割・可能性と、食のバックアップ拠点としての「釧路」について記述してきました。

本章では、食料以外の分野も含めた、「北海道が担うバックアップ機能（想定される6項目）」の視点から、釧路地域が担い得る具体例を示し、複合的な機能を備えたバックアップ拠点機能の形成について、参考としてまとめます。

○6項目の視点○

食料・水の安定供給、産業活動の分散化の受け皿、エネルギーの安定供給
生活・居住の場の提供、行政機能の継続支援、被災地への支援体制の構築

《拠点形成の基本方向》

- ・ 釧路市（白糠町域含む）は5つの工業団地を有しており、釧路港、釧路空港を活用できる利便性や安価な土地、同一市内ながら臨海型、内陸型など立地、気象環境がそれぞれ異なる点を活かして、適地活用による大規模拠点を形成
- ・ 大災害時に備えた食料貯蔵・供給体制の確保（港湾倉庫、冷涼な気候を活かした貯蔵、流通備蓄の活用など）
- ・ 農水産物や加工食品などの安定的な生産・貯蔵・供給体制の強化
- ・ 国際バルク戦略港湾を活用した飼料の備蓄・安定供給と酪農業の強化、畜産業の誘致・拡大
- ・ ミネラルウォーターの流通備蓄を進めるなど、清らかなで豊富な水資源の活用
- ・ 高い日照率を活かしたメガソーラーなど再生可能エネルギーの生産、供給基地の誘致
- ・ 石油基地、LPG基地、LNG基地（2015年稼働予定）の流通機能の強化によるエネルギーの安定供給
- ・ LNG基地（2015年稼働予定）を活用した冷熱利用（エネルギー副産物の利用）
- ・ 国内唯一の坑内掘り炭鉱技術の保全・継承（多様なエネルギー資源の確保）
- ・ 環境配慮型データセンターの立地促進（冷涼な気候を活かし、電子機器冷却用の電気エネルギーの消費を極限まで削減可能）
- ・ コールセンターの立地促進（非常時の情報発信機能を代替）
- ・ 避暑用夏季一時滞在施設の拡充や公営・民間住宅の余力を活用し、被災者の一時避難や移住受け皿機能を強化（東日本大震災で多数の受け入れ実績）
- ・ 災害時における人的支援や生活用品の備蓄（冷涼な気候が劣化を防ぐ）、輸液などの備蓄、供給体制の強化（医薬品製造業の強化・誘致）
- ・ 道央圏のバックアップ拠点との相互連携によって、北海道としての拠点機能を強化

V. 参 考 資 料

「釧路食糧備蓄基地研究会～釧路食料基地構想協議会」 主要活動経歴

【主な活動内容】

※釧路食糧備蓄基地研究会：56回の例会・フォーラム等を開催

昭和63(1988)年11月	釧路食糧備蓄基地研究会 設立 講演「食糧備蓄に関する国の動向について」(北海道開発局 近藤専二氏)
平成4(1992)年7月	講演会開催 記念講演「地球時代における地方都市の役割」(経済企画庁 大隅正憲氏) 「釧路地域におけるヒートパイプによる凍土構築実験報告」 (清水建設株式会社技術研究所 了戒公利氏、他)
平成6(1994)年4月	釧路食糧備蓄高次加工基地基本計画報告書」説明会開催 調査報告説明(北海道地域総合研究所 松本収氏)
平成9(1997)年2月	「世界の中の Kushiro City～地域振興と技術活用の可能性～」開催
平成11(1999)年4月	報告会開催 基調講演「ひがし北海道の21世紀戦略」(釧路公立大学 加藤和暢氏) 報告「港と食が拓く新国際交易都市・釧路」への提言 リレートーク(釧路市長 綿貫健輔氏、釧路開発建設部 上原泰正氏他)
平成15(2003)年11月	フォーラム「さあ、利活用に向けて一歩踏み出そう」 ～釧路の冷熱エネルギーと食糧備蓄」開催 基調講演「自然冷熱エネルギー利用について」 ～雪氷冷熱エネルギーの世界的な事例～ (北海道大学名誉教授 落藤澄氏) 「コンテナを活用したアイスシェルダー型設備による冷熱エネルギーの活用実験」(釧路根室圏産業技術振興センター 原田隆行氏)

※釧路食料基地構想協議会

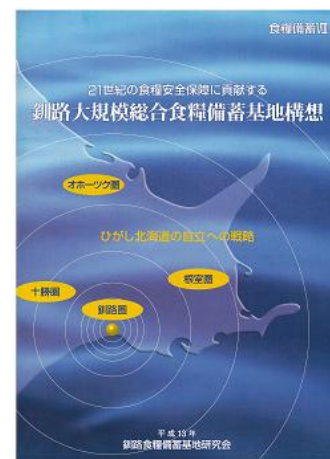
釧路食糧備蓄基地研究会を前身として、幅広い角度から取り組みを進めるため「釧路食料基地構想協議会」を平成21(2009)年12月に発足。

平成23年(2011)3月より各種勉強会を開催(3月：MSC認証勉強会、4月：これでわかるTPPセミナー、6月：酪農業を知るセミナー、12月：流通型食料備蓄システムの可能性、ほか)。

初年度より釧路港のポートセールス活動に参画し、食料基地として発展を目指す観点から「ひがし北海道」の連携強化の必要性をアピールしている。



【写真①】



【写真②】

【これまでの刊行物】

平成2(1990)年5月	食糧備蓄Ⅰ「地方都市における考察」
平成3(1991)年4月	食糧備蓄Ⅱ「関係文献・スクラップ集」
平成4(1992)年7月	食糧備蓄Ⅲ「釧路食糧備蓄高次加工基地構想」
平成5(1992)年7月	食糧備蓄Ⅳ「釧路地域におけるヒートパイプによる凍土構築実験報告書」
平成6(1994)年1月	食糧備蓄Ⅴ「北太平洋の国際交易都市をめざして ～釧路食糧備蓄高次加工基地基本計画報告書～」
平成11(1999)年4月	食糧備蓄Ⅵ「『港と食が拓く新国際交易都市・釧路』への提言」【写真①】
平成12(2000)年3月	食糧備蓄Ⅶ「大規模総合食糧備蓄基地構想展開調査報告書」
10月	「大規模総合食糧備蓄基地構想展開調査報告書(概要版)」
平成13(2001)年3月	食糧備蓄Ⅷ「釧路大規模総合食糧備蓄基地構想」【写真②】

釧路食料基地構想協議会 「食料備蓄・供給基地構想」策定検討部会

（構成組織）

釧路食料基地構想協議会・幹事会構成会員

釧路市漁業協同組合
釧路商工会議所
栗林商船(株)釧路支社
ホクレン農業協同組合連合会釧路支所
北菱産業埠頭(株)釧路支社
北海道漁業協同組合連合会釧路支店
三ッ輪運輸(株)
よつ葉乳業(株)根釧工場

釧路食料基地構想協議会・会員

釧路管内商工会連合会
(財)釧路根室圏産業技術振興センター
(株)三ッ輪商会

オブザーバー（行政関係機関）

北海道開発局釧路開発建設部
北海道釧路総合振興局
釧路市
釧路町村会

釧路食料基地構想協議会

（事務局）

〒085-0847

北海道釧路市大町1-1-1 道東経済センタービル4階

釧路商工会議所企画広報課内

電話 0154-41-4141 FAX 0154-41-4000

発行年月：平成24（2012）年1月（第1版）